

令和4 年度

事 業 報 告 書

特定非営利活動法人 ゆどうふ

1 事業の成果

【令和4年度総括】

令和4年度を総括すると、令和2年春以降の新型コロナウィルスが生活に影響を与え続ける中、生活中でコロナ以前の感覚を取り戻せる局面が少しづつではあるが感じられるようになった。とはいっても不安定な国内/世界情勢も相まり、安定した日常の感覚を取り戻し維持できる生活とは未だ程遠いといえる。フリースペースふらっとでは令和5年3月13日よりマスク着用を個人判断に委ねる形をとっている（職員は原則着用）。事業所を利用する個々人が必要な情報を収集し、自身のあり方について主体的に決めてほしいと考えているが、同時に事業所内の安心・安全面の確保に関して法人として取り決め判断していくという姿勢を維持していきたいと感じている。なお開閉所時間は令和2年度に決めた時間帯と変更なく運営を行なっている。

若者、ひきこもり支援分野においては高齢ひきこもり世帯の増加が社会問題化される一方で、青年期ひきこもりに対する予防支援が立ち遅れ、まさに課題が山積する状況である。令和5年3月の内閣府による調査ではコロナ禍の影響も相まってひきこもり者が増加していることがわかっている（15～64歳で推計約146万人）。国、自治体もさまざまな施策を検討しているが未だ有効なインフラは整備されておらず、多様な若者の権利が尊重され自身の人生を主体的に生きられるという状況には至っていない。インフラとして整備されていないということは現時点において具体的な中長期ビジョンが描きにくいこと、利用する若者や家族、従事する職員に対して継続的に必要な環境を用意することの難しさにつながる。そのような状況下、令和4年度ゆどうふも自治体や他関係機関との連携しながら試行錯誤を続けてきた。一方で町田市鶴川地区から現在の小山地区に移転して5年、この間に多くの出会いや交流、協働も生まれた。今年度においても関わる方々と多くの有意義な時間を過ごせたことは大変貴重であったと考えている。

2 事業の実施に関する事項

（1）特定非営利活動に係る事業

（事業費の総費用【 5,133 】千円）

定款に記載された事業名	事業内容	日時	場所	従事者のべ人数	受益対象者範囲	受益対象者べ人数	事業費（千円）
ひきこもり状態の当事者又はご家族に対する支援活動	フリースペース運営等	2022年4月1日～2023年3月31日 (計 184日)	フリースペースふらっと (東京都町田市 小山町 2595-1)	455人	ゆどうふ 利用登録者等、生きづらさ を抱えた若者	568人	1,300

ひきこもり状態の当事者又はご家族に対する支援活動	ひきこもり当事者及びひきこもりの子を抱える親グループ活動指導事業	祝日を除く毎週金曜日、第3火曜日	町田市保健所中町庁舎 町田市健康福祉社会館 ほか	110人	グループ登録者(当事者、親)	196人	1,311
ひきこもり状態の当事者又はご家族に対する支援活動	専門サポート事業	2022年4月1日～2023年3月31日	フリースペースふらっと(東京都町田市小山町2595-1)及び訪問先	387人	ゆどうふ利用登録者等、生きづらさを抱えた若者とご家族	382人	2,101
ひきこもり状態の当事者又はご家族に対する支援活動	わらしべワークプロジェクト	2022年4月1日～2023年3月31日	町田市小山地区を中心とした市内各地 計79回	85人	生きづらさを抱えた若者	114人	78
ひきこもり状態の当事者又はご家族に対する支援活動	講演会、研修等	2022年4月1日～2023年3月31日	NPO法人ワーカーズコープ山梨・三多摩事業部ほか	22人	町市民、関係機関職員等	200人	259
自己表現サポート事業	アサーションワークショップ	2022年5月	フリースペースふらっと(東京都町田市小山町2595-1)	3人	アサーションについて関心のある方	4人	33
自己表現サポート事業	アサーションプログラム	2022年5月、9月、2023年1月(計3回)	NPO法人けやきの会、さがみはらサンエール	6人	さがみはら若者サポートステーション利用者等	47人	51

(2) その他の事業
なし

【職員体制】

今年度においては前年度総会で議事にあがっていた役員の増員を行なった。また現場職員の体制に関して以下の変更があった（表1）。

表1.令和4年度 役員・職員の入退職

役員	柳原 順子氏	令和4年8月	理事として就任
職員	成沢 知紀氏	令和4年9月	支援員として入職
	奈良橋 修氏	令和4年9月	支援員として入職
	藤原 奈緒子氏	令和5年4月	支援員として入職
	三井 泰平氏	令和5年2月	退職

・役員体制

ゆどうふ正会員であり、法人が活動拠点を小山に移転してから地域で様々な交流のある柳原順子氏に令和4年8月、役員として就任いただいた。法人の役員体制（理事会構成員）は計6名（理事5名、監事1名）となっている。

・職員体制

令和3年度にひきつづき、居場所ふらっとに常勤の支援責任者（三井 泰平氏）を配置し、利用メンバーの居場所定着、居場所内プログラムの企画・実施、わらしへをはじめとした社会参加体験事業への誘導を行う等活動拠点の基盤整備を図った。下半期からは非常勤職員として奈良橋修氏、令和5年4月からは藤原奈緒子氏が居場所担当として入職、更なる活動コンテンツの充実化、活性化を図っている。なお前述の三井氏は令和5年2月末に退職、後任として中村三樹氏が居場所担当として入り、同年4月より居場所は職員3名体制で運営している状況である。

わらしへワークプロジェクトに関しては令和4年7月末に担当の峰崇氏が退職、後任として同年9月より成沢知紀氏が入職、現在わらしへワーク運営、地域とのコーディネート等わらしへ事業全般に従事している。

・丸紅基金人的支援について

社会福祉法人丸紅基金の取組みの一環である人的支援プログラム（※）を通して、令和4年5月より丸紅OBである立澤一郎氏が活動に参加していただいている。立澤氏には寄付募集、助成金申請、トヨタ財団による事業改善プログラム「カイケツ」へのオブザーブ参加等に従事。契約は令和4年9月30日まで（契約者双方の合意があれば更新あり）。

※丸紅基金人的支援

社会福祉法人丸紅基金が実施している人的支援の一環として、丸紅株式会社OBが支援先団体に赴任し現場業務に従事する取り組み。

【行政連携】

・町田市生活就労準備支援事業への参画

令和4年8月に実施された町田市生活困窮者自立支援制度内就労準備支援事業（※1）のプロポーザルにNPO法人ワーカーズコープとのジョイントベンチャー契約（JV）を組んで参加したが結果は不採択だった（NPO法人インクルージョンセンター東京オレンヂが受託）。

※1)就労準備支援事業

「基本的な生活習慣に課題がある」「社会との関わりに不安がある」「意欲があるものの就労に結びついていない」といった就労や自立が困難な、生活保護受給者及び生活困窮者、将来的に生活が困難となる恐れのある者等に対して、就労準備支援事業による継続的かつ一貫した支援を適切に実施することにより、一般就労が可能な状態とすることを目的とする事業（町田市同事業プロポーザル説明書より抜粋）。

・町田市保健所

町田市保健所とはひきこもり本人グループ（マンボウ）、親グループの運営事業受託を通じ連携を行なっている。昨今のひきこもり世帯の高年齢化、課題の複雑化と深刻化により支援対象者像が大きく変化しつつ中、既存の事業運営をそのまま受託するだけでなくグループの進め方、事業デザインについても意見交換する場面が多くなりつつある。

マンボウグループにおいては、参加する若者がゆどうふに見学に来たり、グループ OB がわらしべワークプロジェクトに登録する等、ゆどうふの本来事業と委託事業とが緩やかながら地続きになってきており、マンボウグループに乗れなかった若者のフォローアップ含めマンボウグループとゆどうふとのグラデーションの構築を進めている。

【地域連携】

・町田市内における連携

令和4年度も前年以前にひきつづき地域関係機関、個人との連携強化を図った。特にわらしへワークプロジェクトにおけるワーク受注を通して形成されたネットワークをもとに地域イベントへの出演、フードドライブへの参加等、連携・協働の形が多様になりつつある。

その他、町田市内の企業との連携についても模索を開始している。令和4年10月には町田サルビアロータリークラブに辻岡、立澤が参加。ひきこもり状態にある若者の現状と社会参加のイメージに関する講演を行なった。同年11月には町田市商工会議所に加盟している。

・町田市近隣エリアとの連携

令和4年度においては、東京都日野市、小平市、八王子市において居場所づくり、わらしへの取り組みに関する研修・講座を行なった。

特に八王子市では令和4年4月より WAM（独立行政法人福祉医療機構）の助成金を受け、家族会である「ぶなの会」とNPO法人ワーカーズコープが中心となり連絡会を組織、毎月集まり八王子市における居場所づくりの検討を進めている。連絡会には上記2団体のほか、八王子在住の当事者、地域包括支援センター、市生活困窮者担当が参加しており、今後担当課である福祉課、八王子市社協、八王子市保健所にも働きかけていく予定である。ゆどうふは令和4年度アドバイザーという形で連絡会に参加しているが、会議の中では八王子の連絡会と町田市関係者との間で協働できる要素はないかについての議論も生まれている。

【全国若者・ひきこもり協働実践交流会 in 三多摩への参加】

ひきこもり、若者支援の全国ネットワークである一般社団法人 JYC フォーラムが毎年開催している「全国若者・ひきこもり協働実践交流会」に参加した。今年度の開催日は令和5年2月18日・19日、開催地は東京都三多摩地区、会場は東京経済大学ということで、ゆどうふは現地実行委員団体としての参加となった。1日目分科会「心地よい居場所から社会につながる」ではコーディネーター、実践報告を担

当したほか、集会オープニング演奏に参加した。2日目は国立公民館で行われたフリンジ企画に運営スタッフ、演奏者として参加した。

1日目の分科会では支援スタッフ（三井氏、成沢氏）による居場所及びわらしべワークプロジェクトの事業説明を行い、その後ゆどうふを利用している若者が登壇、三井氏との対談形式でゆどうふにつながった経緯、居場所やわらしべの活動で得た体験や心情について話をした。後半はフロア来場者と「若者の安心できる空間を地域、社会にどう広げていくか」というテーマでグループトークを行なった。分科会には居場所等に関わる支援者、利用する若者の他、ご家族や受入企業も参加、闊達な意見交換が行われた。

2日目のフリンジではゆどうふ音楽部によるパフォーマンスのほか、町田市でつながりのある人たちで構成されたバンド「うまけんとゆかいな仲間たち」でも参加メンバーとして出演した。また来場できないが作品出展をしたいという利用メンバーが作成した絵、イラストを会場で展示・販売を行なった。

JYC フォーラムに関しては令和4年5月に代表が理事として就任。町田市のみならず全国の若者支援分野における課題、分野自体のインフラ整備等について今後関わっていく。

【事業別報告①若者支援事業部】

令和4年度の支援実績は以下の通りである（表2）。

表2. 令和4年度支援実績

	開所日数	通所者のべ人数	1日あたりの 通所者数平均	個人サポート		わらしべワーク 参加のべ人数
				カウンセリング	アウトリーチ	
第1四半期	47	164	3.49	86	16	11
第2四半期	46	133	2.89	75	12	25
第3四半期	46	137	2.98	93	11	29
第4四半期	45	134	2.98	82	7	25
年度計	184	568	3.09	336	46	90

自室から出ることがままならない若者から、地域や職場で自分らしく働く形を模索する若者まで、ゆどうふを利用する若者が一人ひとり、ゆどうふの支援を自分にあった形で受けるべく選択できる体制を維持構築すること、また各セクションが一方のステップモデルではなく、本人が納得いくまで行ったり来たりの試行錯誤が可能とすることを目指し活動を進めた（図1）。



図 1.若者支援事業 相関図

【事業別報告②自己表現サポート事業】

・音楽イベント Youdo ! Festival2023

令和4年度、音楽イベントの実施は行なっていないが令和5年5月13日に開催したYoudo!festival2023の実行委員会を令和4年10月に組織、毎月ミーティングを重ねた。

・アーサーション事業（※）の確立(カイケツ)

法人の事業収益源が民間団体からの単年度助成が占める比率が高いことから、早急に一定の収益が望める自主事業を確立する必要がある。そのような背景がある中、令和4年1月から開始したトヨタ財団による事業育成プログラム「カイケツ」に参加し、自主事業としてのアーサーション事業をどう展開していくかについて検討を進めた（別添資料参照）。

現時点での取り組み

・スタッフミーティング内での「アーサーションの時間」を設定

職員のアーサーションに関する理解、知識の向上を目的にスタッフミーティング内でアーサーションに触れる機会を創出している。アーサーション関連文献の読み進めを行うほか、現行の支援活動とアーサーションとの接点、関連性についての確認等を行なっている。

・法人関係者による外部研修の受講

法人内部での学習以外に、外部でのアサーションに関する講座の受講を進めた（表3）。

表2.アサーション外部研修の受講状況

中村 三樹氏	日本精神技術研究所「アサーション講座」ベーシックコース、実践コース
三井 泰平氏	日本精神技術研究所「アサーション講座」ベーシックコース
山岸 翼氏	日本精神技術研究所「アサーション講座」ベーシックコース
柳 倫之氏	日本精神技術研究所「アサーション講座」ベーシックコース

※アサーション事業

アサーションは自分、相手双方を尊重したコミュニケーションを指し、自分らしく主張、表現する為に重要な概念である。法人では2015年の法人設立年より毎年ワークショップの主催や他団体での研修等を継続的に実施している。